

水稻の作柄に関する委員会（令和2年度第1回）の意見

1 気象の推移・予報等からみた作柄への影響

- (1) 気温・日照時間は、6月までは平年を上回って推移し、7月は北海道を除き低温・日照不足となったものの、8月以降は天候が回復し、気温・日照時間ともに平年を上回って推移した。

9月以降に予想される今後1か月程度の天候の見通しでは、気温については高い、日照時間については平年並みと予想されている。

また、7月の長雨や豪雨、9月の台風に見舞われた地域があった。

- (2) 本年の水稻は、早場地帯では全もみ数が一部を除き平年並み以上に確保されると見込まれるものの、7月の低温・日照不足等による穂数・もみ数等への影響や、8月以降の高温による登熟・品質等に与える影響が懸念される。

また、台風、集中豪雨、フェーン現象等による影響も懸念されるほか、いもち病、トビイロウンカ、斑点米カメムシ類等の発生が多いと予想されている地域もある。

2 次回の調査に当たって留意すべき事項

- (1) 早場地帯や遅場地帯ごとの生育ステージの違いによって、7月の低温・日照不足が穂数・もみ数等へ与える影響を見極めるとともに、8月以降の高温が登熟・品質等に与える影響について留意する必要がある。
- (2) 令和2年7月豪雨、9月の台風等による冠水・倒伏等の被害、台風に伴うフェーン現象が発生した地域では、登熟・品質等に与える影響を見極めるとともに、今後の台風や集中豪雨等による作柄への影響にも留意する必要がある。
- (3) いもち病、トビイロウンカ、斑点米カメムシ類等の病虫害の発生が多いと予想される地域においては、その発生状況に留意する必要がある。

3 次回のもみ数確定期調査の調査期日

本年の水稻の出穂状況は、一部で遅い地域もあるが、全般的にはおおむね平年並みと見込まれることから、次回のもみ数確定期調査は、例年どおり9月15日現在とすることが適当と考える。

【参考】水稻の作柄に関する委員会委員

- (座長) 雨 宮 宏 司 農林水産・食品産業技術振興協会 理事長
荒 井 裕見子 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構次世代作物開発研究センター
稲研究領域稲栽培生理ユニット 主任研究員
大 川 泰一郎 国立大学法人東京農工大学大学院農学研究院
生物生産科学部門作物学教育研究分野 教授
萱 場 互 起 気象庁地球環境・海洋部気候情報課異常気象情報センター 調査官
黒 田 栄 喜 国立大学法人岩手大学 名誉教授
山 岸 順 子 元国立大学法人東京大学大学院教授
吉 永 悟 志 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構中央農業研究センター
生産体系研究領域 領域長